



企画にあたって

泉 知里

(国立循環器病研究センター心臓血管内科部門心不全科部長)

弁膜症治療はめざましく進歩しています。最も大きな変化は、弁膜症領域におけるカテーテル治療の導入です。外科領域でも低侵襲外科手術や大動脈弁に対する形成術の普及、人工弁の改良など、多くの進歩がみられます。さらに、心房細動に伴う弁膜症や低圧較差大動脈弁狭窄症などの疾患概念に対する見直しも行われてきました。そのような状況の下、2020年3月に日本循環器学会から「弁膜症治療のガイドライン」が、2020年12月には ACC/AHA ガイドライン、2021年8月には ESC ガイドラインが改訂されました。

しかし弁膜症治療は、ガイドラインどおりにピッタリと当てはまる症例はむしろ少なく、ガイドラインを参考にしながら Tailor-made に治療を行うことが重要になってきます。ここが医者手腕の見せどころで、エビデンスや経験に基づいた知識をフルに使って、治療方針を選択していくことになります。

しかし一人一人の経験は限られていますし、多くのエビデンスをすべての疾患において取得するのは多忙な毎日のなかで難しいのではないのでしょうか？

ガイドラインを熟知したうえで、弁膜症診療における最新の知見や弁膜症治療のエキスパートの意見を共有することで、ガイドラインを超えた Tailor-made 診療が可能になると思います。同じ疾患でも、外科医からみたのと内科医からみたのとでは少し考え方が異なる場合もありますが、お互いの意見を知ることにより、より理解が深まってきます。そんなことを思いながら、今回の企画を考えました。

本書が、個々の患者さんに最適な治療を提供できる一助になれば幸いです。